

農泊やグリーンツーリズムで 「居場所」と「出番」を創出すること

株式会社ドリームファーマーズ JAPAN 代表取締役社長 宮田宗武

どの業界でも担い手不足だという認識はある。もちろん、農村・農業においても深刻な担い手不足である。そんな中でも、各自治体などが新規就農に関しての様々な取り組みを行っている(大分県では毎年200名程度の新規就農者がいるようだ)。

一方、農業を廃業する側への取り組みは目立ったものを知らない。実際の現場では、「最近見ないよね」「体調悪いみたいよ」「後継者ないらしいね」などという声が聞かれ、そうした今後の対策がままならない農業従事者においては営農への気力が低下し続け、耕作途中においても無責任に放棄地を発生させる末路をたどることも少なくない。

そんな突然の終農は、地域内外で多く見かける。高齢化や過疎化が進む中では、特に域内の情報交換の活性化は不可欠である。つまり住民同士の関係性が希薄となりコミュニケーション不足が進むことは、複合的に地域産業の継続においても悪影響を及ぼすことになる。そこで、域外からのお客様などに来ていただくことによって域内の交流が活性化し、住民同士の関係性を再構築できるのならば、「農泊」がその手段になるのではないだろうか。

そもそも、農泊は「交流による異日常」をサービスとしている。私たちの住む安心院(大分県宇佐市)においては、「一度泊ると遠い親戚、10回泊ると本当の親戚」というキャッチコピーがあるほどリピーターが多いのである。また、お客様との濃厚な交流は近隣の協力を必要とすることも多い。農泊時に「居場所」と「出番」を域内外に生み出すことはとてもよい関係を生む。これは農泊やグリーンツーリズムの新しい役目となり得る。昨今コロナ渦も重なり、域内のコミュニケーション不足が強まっている傾向にある。現在、農業者の間においても耕作放棄地が発生しそうだという情報が共有さ

れていないような状況である。もしその情報が事前に共有されていたなら、新たな担い手とのマッチングの可能性もあったと思われる。

「居場所」と「出番」は、農泊やグリーンツーリズムにおいて、先輩たちの農村・農業でやってきたことを肯定してくれる。それらは住民のモチベーションアップにもつながり、健康寿命を延ばす効果も期待できるのではない。実際に現場では、健忘症が改善されたり、還暦を過ぎてピアスを開けおしゃれするようになったり、元気な先輩たちが活躍するようになっている。私自身もみんながキラキラしている農村はうれしい。

私は、ドリームファーマーズJAPANという法人を農家仲間7人で設立し、6次産業化を中心とした事業を展開している。最近では、農泊やグリーンツーリズムと関係を持ちながら事業を行っている。

特にZ世代といわれる若者と一緒に「居場所」と「出番」をデザインするような取り組みをしている。今年は、地元国立大学や商工会と連携し、グリーンツーリズムビジネスを真剣に取り組んでいこうと古民家を改修し、YouTubeやラジオなどで情報発信も行っている。

農村・農業には農福連携や半農Xなど、いろいろな可能性があるけれども、やはり腰を据え基幹産業を担う産業が多いほど域内は活性化される。ただそのためには域外の支えがないと持続しない。だからこそ域内の質のいい関係性をみせることは大切である。

私は、農泊やグリーンツーリズムを通じて「居場所」と「出番」がある農村・農業にすることは、この地域を持続可能な体質にする大切な一歩だと考えている。

是非、安心院に来てほしい。居場所と出番はつくりましますよ！

(みやた むねたけ)